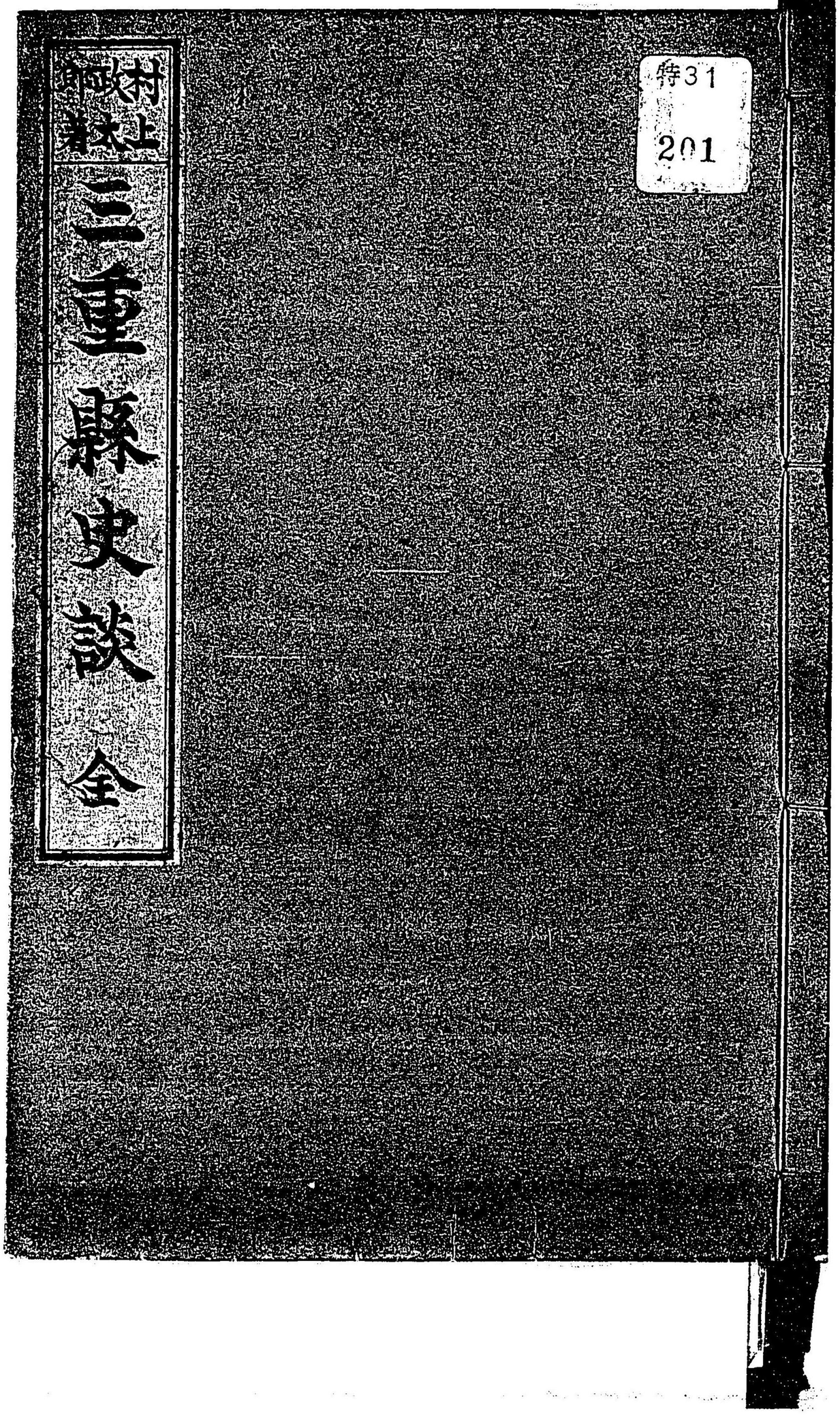


特31
201

025653-000-7

特31-201

三重県史談

村上　政太郎／著

M26

ADC-3170

特31
201

三重縣史談

緒言

一この書は小學校教則大綱の旨趣にしたがひ、縣内鄉土史談の教科用書に供せんが爲め編纂したるものなり、其の教授の方法によりては、尋常高等何れにも用ふるをを得べし、

史談豫備教授の一端に供へ、次に時代を逐ふて、關係ふかき偉人豪傑の傳記に及ぼしたるは、事歴の大要、事實の脉絡に注意し日本歴史

を學ぶの素地を與へんが爲めなり、

一偉人豪傑の傳記は、兒童の嗜好に適すべき有名なるものゝみをえらび、其の他類似の説話は條下に伴はしめてこれを出せり、是其の繁僿冗長ならんことを避けたればなり、

一この書は、兒童をして、記臆しやすからしめんことを主とせたれば、行文を平易にし、誦讀の便をはかり、耳遠き語辭の類はつとめてこれを省けり、只人名其の他止むを得ざる文字にはそべて傍訓を施せり、

一書中著しき事蹟は、これに關する年記を知るの必用あれば、行文中に示すものゝ外は、凡てこれを欄外にをき、一目明瞭たらしめんことを期せり、

一此の書の挿畫は、衣服器具肖像等一々憑據する所あり、教授者宜しく其の心して教へんことを要す、

明治廿五年十二月

編者識

三重縣史談

目次

伊勢兩宮　神嘗祭の圖
有名なる神祭　伊賀祭の圖　四日市祭の圖
有名なる佛寺の祭　專修寺讀經會の圖　觀音寺鬼押の圖
結城神社　結城入道安濃津漂着の圖
吉田兼好の庵　兼好法師幽居の圖
本居神社　宣長大人肖像
招魂社　桑名招魂碑の圖
伊藤小左衛門　黒田孝富　伊藤小左衛門紀念碑の圖

神武天皇御東征　東夷御征討の圖
日本武尊　田村將軍騎馬の圖
田村將軍　忠盛老僧を捉ふる圖
伊勢平氏　多氣屋舗の圖
伊勢國司　白米城跡の圖
白米城の戰
信長長島征伐
北畠具教　敵將と搏戰の圖
本多忠勝

藤堂高虎　高虎公肖像
九鬼嘉隆　鳥羽城の圖
山田奉行　奉行所の圖
松平定信　樂翁公肖像
藤堂高兌　高兌公孝女慰問の圖
正木嘉兵衛　西島八兵衛
三井宗笠　河村瑞軒
陶工其他の工藝　桑名城の圖
芭蕉翁　芭蕉翁肖像
谷川淡齋　足代弘訓　御遷宮の圖　付硯面の圖

山中天水其他漢學者
藩治の有様　伊賀越復讐の圖　寺子屋の圖
縣治の沿革　縣會議場の圖
近藤真琴　松浦竹四郎　近藤真琴の肖像　松浦竹四郎蝦夷地露宿の圖
竹川竹齋　竹齋の肖像

三重縣史談

伊勢兩宮

吾々のいたゞき奉る天照大神と申すは、我が天皇の御先祖にまーくてたふときと限りなく、人々の家、何れも皆神棚にまつりをさめて、朝夕敬拜せさるものなし、宮居は、宇治五十鈴川のほとりにありて、内宮と稱す、參詣の人々、年中たゆるとなし、

はじめ大神、御孫瓊々杵尊につげてのたまはく、豐葦原の瑞穗の國は、我が子孫の君たるべき地

なり、汝ゆきてれさめよと、乃御手づから八咫鏡、叢雲劔、八坂瓊曲玉をさづけ給ふ、これいはゆる三種の神器にして、天皇の御ちるしとして、御代々傳はれるものなり、

ことに御鏡は大神の御神躰として、むかしより宮中にまつり給ひしが、崇神天皇神をうやまひ給ふ御心のふかくをはしまをよりこれをけがさんをおそれ給ひ、大和の笠縫といへる邑にうつしまつらる、垂仁天皇の御代倭姫命といへるが、大神の誨によられて、更に今の所にうつし、

祭られしものなり、

豊受大神の宮は、山田にありて、外宮と稱せり、大神は五穀の神にれわしませば、又の御名を保食神ととなへ、内宮とともに、人々の敬ひ奉る所なり、

初め雄略天皇の御代、天照大神の御つげに「我うけもちの神、丹波の真名井にあれば、はやく彼の神をむかへよ」とのり給ひしかば、彼の地より、今の山田にうつしまつられしといふ、天照大神の御遷座をさるを凡そ四百八十餘年なり、世内宮と

共に稱して、伊勢兩宮といふ、
大神の御世の程は人民生活の度まことにいやしく、僅に草木の實などを食となしたりーが、大神深くこれをあわれみ給ひ、水陸に田をつくり、稻を植ゑ米穀をとり、これを炊ぎて食とすべきこと、又蠶を養ひ糸を織りて、衣服の料とすべきを教へ給ひきされば我か國太古より早く衣食の良法を得て、安らかに生活したりーは皆神の賜なり、
毎年十月十七日は、神嘗祭とて新穀を取り、大神にそなへ奉り、其の年の豊作なりしことをつげ奉り、大神のたまものを謝し奉る日なり、

有名なる神まつり

社をたて神又は人をまつるは、我か國のならはせなり、
されば町あり、村あれば社なき所なし、我か縣に

ては、上野の天神、桑名の春日、四日市の諏訪、津の八幡などは、最も有名なる祭にて、昔より其の地の鎮守神として、あがめ来れる社なり、

伊賀の天神は、菅原道真といへる人を、祭る社にして、社檀拜殿など實に結構をつくせり、毎年十

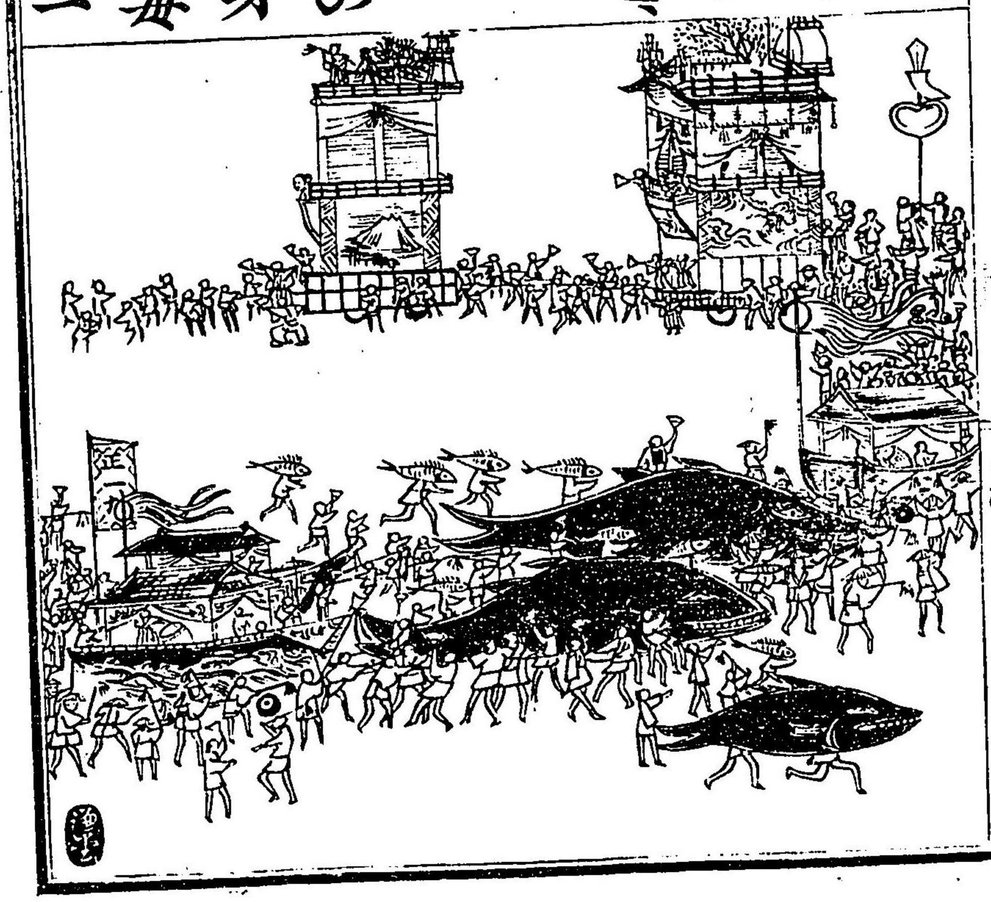
月二十五日は、其祭日にて、此の日は町々より盛なる山車屋臺を出し、ひきめぐるなど、其の樂しきさまゝにはいひがたし、遠近より見物の爲め出づるもの夥しといふ、

津の八幡神社、四日市の諏訪神社、桑名の住吉神社これも大なる社にし

て毎年其の祭禮あり、山車などをひきめぐるさま、天神まつりにかはるをなし、

有名なる佛寺のまつり

佛寺にてまつりのさかんなるは、一身田の專修寺とす、毎年一月七日より一

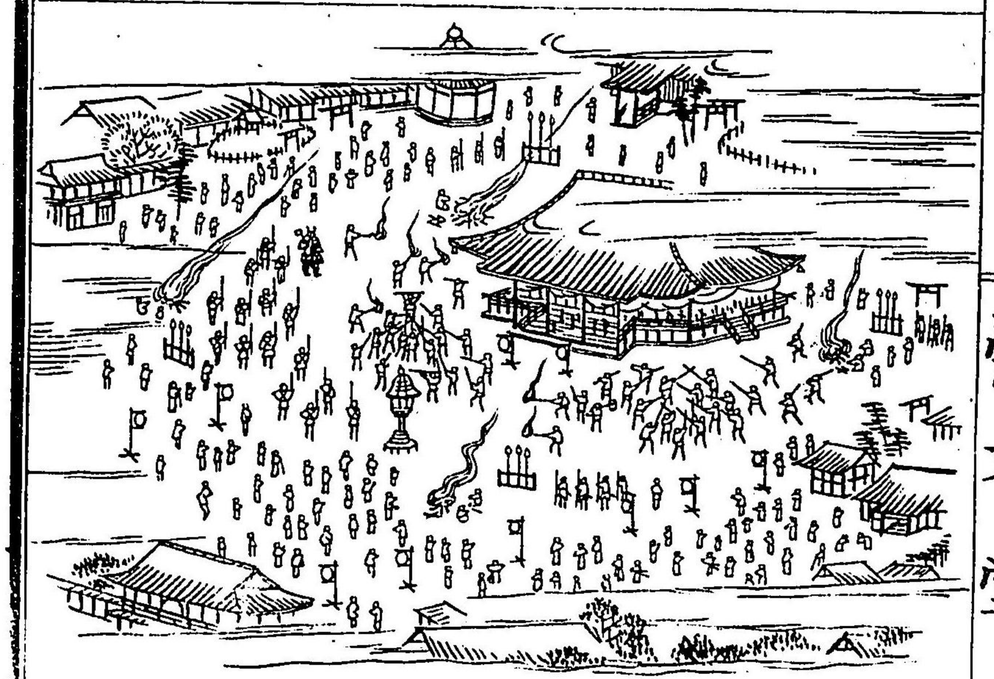


週間盛なる讀經をいとなむ、これを御七夜といひ、四方より詣づるもの、ひきもきらず、

そも此の寺は、僧眞惠法印のたつる所にして、今を去ること凡そ四百年なり、はじめ法印、法義をひろむるの志をたこし、諸國をめぐりけるが、此の地は開祖見眞大師のちなみ

もありしかば、遂にこゝに寓(グウ)して一宗(シュウ)の基(モトイ)をひらきしものなり、

津市の觀音松阪の岡寺など又有名なる寺にして、岡寺は初午(ハツムマ)觀音(ガンオン)と、となへ、毎年舊曆(キユウ)の二月八日が其の祭日なり、津の觀音は毎年四月のはじめが、其の祭日にあたる昔は



紀元二千年代

此の寺に鬼押(ヲサ)へといへるをもしろき式(シキ)ありしが、今は其の風全くすたるに至れり、

結城神社

縣内の神社、其の數多き内に、別格官幣社として人人のよく知る所のものは、結城神社なり、社は結城宗廣の靈(レイ)をまつれる所にして、明治十五年の新建(シンケン)にかゝれり、

宗廣忠義の心ふかく、其の奥(オク)羽(ウ)にあるや、兵を發して時の逆賊(ワルモノ)北條高時をうつ、高時亡(デウ)びて足利尊氏の反(ハン)するや、源顯家等と力を合せ大に賊(ゾク)兵(ヘイ)を

破る、後皇子を奉じて、伊勢より海を航し、東に下る天龍洋を過ぐる頃暴風の起るあり、皇子の行へだに明らかならず、宗廣の船、又海に漂ふこと七日七夜なり、風定まりて今の安濃津へふき着られける、十餘日をへ、猶奥州へ下らんと渡海の順

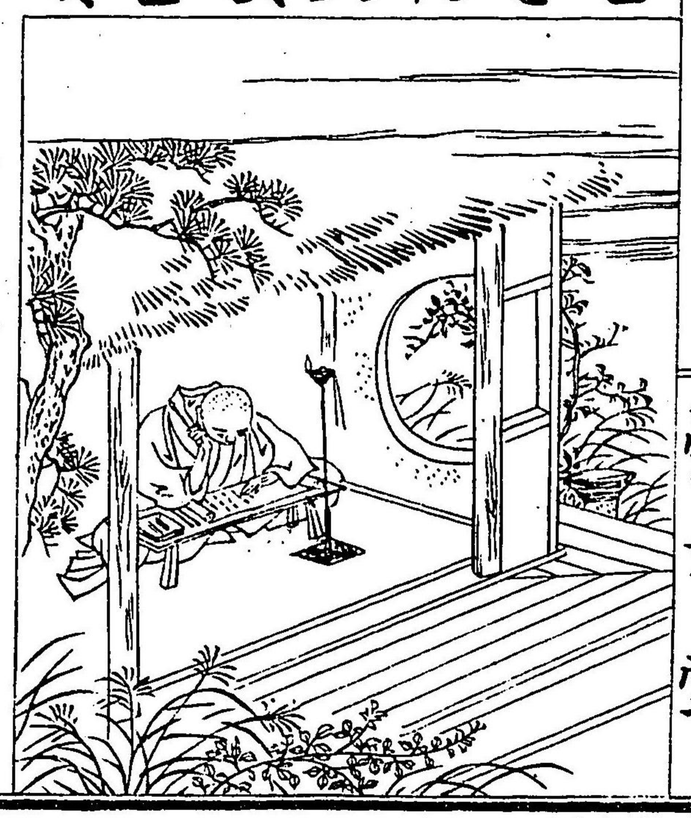
風をまたれしが、不幸なるかな、重病にかゝり遂に此の地に卒せらる、社殿の傍にある碑石は則ち是なり、

吉田兼好の庵

こゝに圖したるは、伊賀の國、田井莊なる吉田兼好が庵なり、むかしは世をのがるゝと稱しかゝる山間の地に、生涯をはてゝしとまゝこれあるとゝしられたり、

兼好わかき時より、學問をこのみ、和歌に長ぜり、後宇多天皇につかへて、北面の士となり、常に武

門のわがまゝなるを
をいかり、心をくだき
て、王政の古に復らん
をはかりけるが、天
皇の崩ご給ふに及び、
大に力をたとし、髪を
けづりて佛門に入り、
居を伊賀の國にうつして、生涯をはてんとせり、
卒するの日、朝廷其の高義をよみし、米五千石、錢貳
千貫を賜はり、且つ墓を此地にきづかしめらる



といふ、

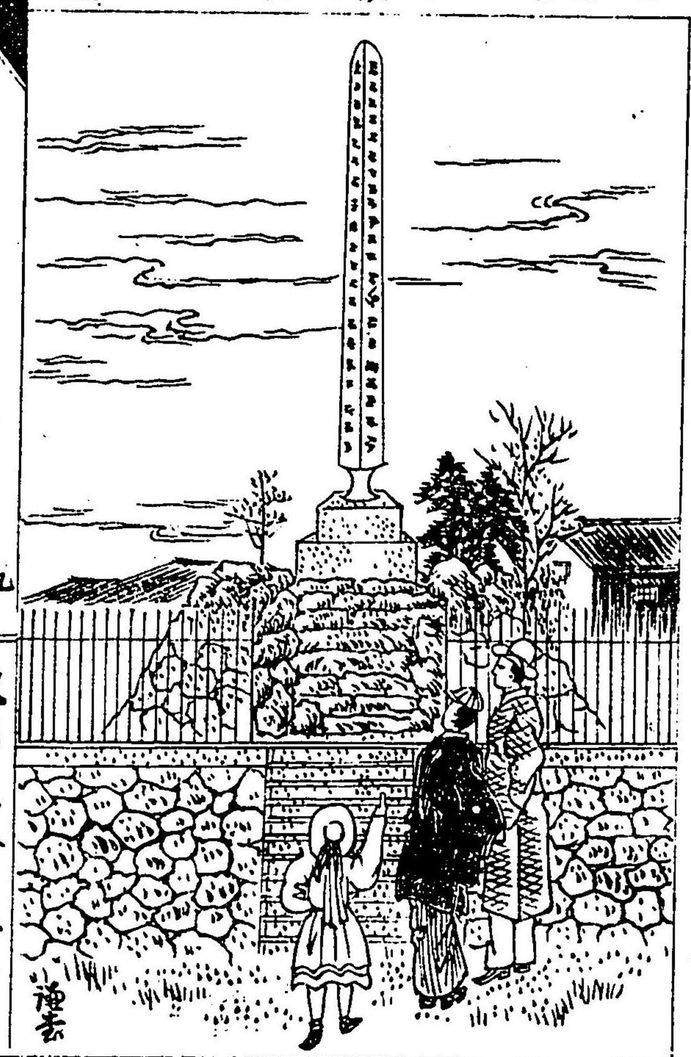
本居神社

本居神社は松阪にあり、宣長の靈を祀れる所なり、宣長少して學をこのみ長ずるに從ひ、皇朝の道にこゝろざし、大に古學の奥をきわむ、世稱して國學中興の祖といふ、當時の學者は各漢學に心を入れ、ひたすら支那

をしたふの風甚しかりしが、宣長深くこれをなげき、王室の尊きと、我が國の愛すべきとなど說き明して、大に尊王愛國の大義を知らしむ、明治の御代にいたり、朝廷其の功をよみし、特に正四位をたくられ、號を櫻根命と賜ひて、これをあがめらる、

招魂社

天皇の御爲め、國の爲めに忠をつくし、功ある人をたふとみて、神にいつぎまつるは、宗廣宣長など昔の人のみにあらず、招魂社とて、今諸方にある社は皆近ごろの人々をまつれるなり、是れ等は、何れも一命を國に報ひし人々なればかしこくも、天皇陛下これを御まつり遊ばされ、人民もあがむるを、死して後の譽といふべし、殊に其の祭日には、角力、競馬、擊劍など、勇しき



奉納物ありて、此等の人の靈をなぐさむるが常なり、桑名、津などの招魂社は即ち其の一なり、

伊藤小左衛門

國のためこゝろざしあつかりし人は、招魂社にまつらるゝ人々の如く世の尊敬をうくるを大にまゝ紀念碑などを設けて、其の功をあらはせり、伊藤小左衛門、黒田孝富の如きこれなり、小左衛門の碑は、四日市に、孝富の碑は亀山にあり、共に名高きものなり、

小左衛門壮年の時より、公益の心あつく、其の頃四

日市に助郷馬とて、荷物運送の用にあてたる荷馬ありしが、故ありて其の數大に減じ、商賣上に甚だしきさしつかへを生ぜり、小左衛門これをうれひ、車を以てこれにかへしほどに、運送の道大にひらけ、人々皆其の便利を感ぜりといふ、

小左衛門後

又生絲製茶

のとに心を用ひ、遂に其の業をひろげ、大なる利益を得たり、今日伊勢茶、室山絲の天下に名高きは皆此人の力なり、

孝富も亦少年の時より心を國事にとゞめ、大に文武の道を習ひしが、當時西洋の人々、ーきりに我國にきたり、天下漸くさわがしくなりければ、孝富甚だこれをうれひ、京都に出て公家衆の間にゆき、なし尊王の心をのべて大に力をつくーたりき、既にして王政も古にかへりめてたく明治の御代となりしかば、藩主をたすけていよく

政に心を用ひしが、不幸にして人の恨をうけ、遂に暗殺せらるゝに及べり、真澂神社にある碑は、則此人の劍をうづめし所なり、

神武天皇の御征討

縣地は古へより、はやくひらけたる國がらなれど、神武天皇の御時は、此の伊勢、紀伊の近傍には、いまだ其の命に從はざるものありけり、天皇これを平らげ給はんとて、遂にいくさをたこして、日向の宮より出て給ひぬ、時に伊勢の地に、伊勢津彦といへるものあり、多くの徒黨を率ゐて、王命をこばみしかば、天皇則ち天日別命といへるを

つかわして、此の國に入らしめ給ふ、伊勢津彦其の勢にをそれ領土を獻じて其の地を去れり、天皇より天日別命をして、其の地をたさめしめ給ふといふ、

天皇は又、御自ら大和の賊をうち亡ぼさんとなし給ひ、海路を紀伊の熊野に（今の北牟婁郡浦村）とり、地の豪族高倉下命を道案内として進み給ひしか、此の地に又、丹敷戸畔などいへるわる者ありて、天皇に手むかひせしかば、天皇此れ等の賊を平らげ、土人をさとしてなつけ給ひ、遂ひに大和に入りて、賊

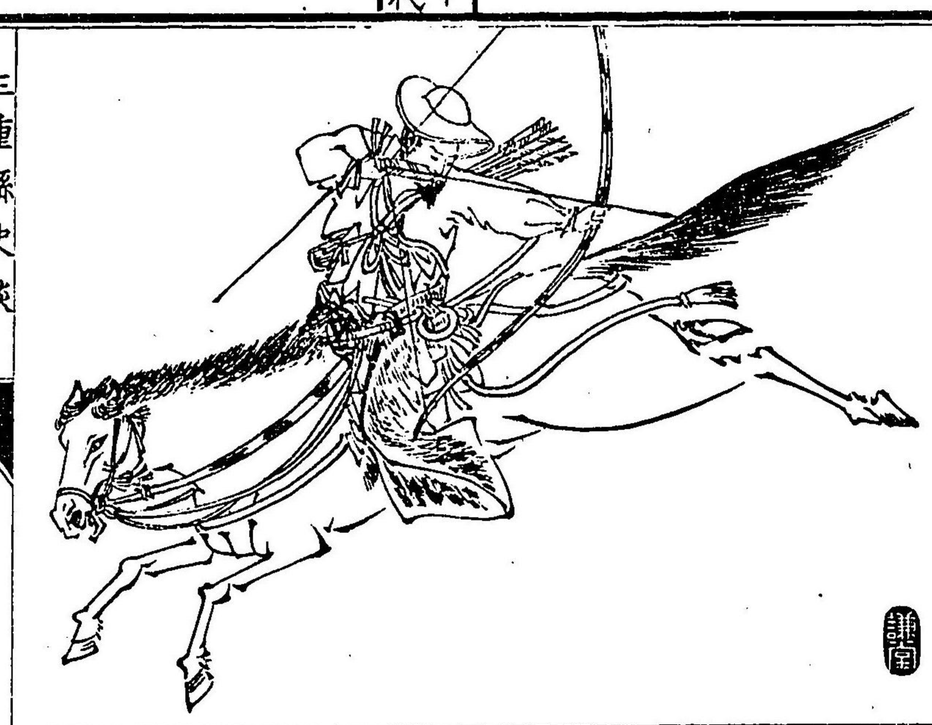
を平らげ給ひき、
其後國造などいへる役人をおかれ、此國をおさめられしが、又伊勢の四郡をさきて、伊賀國とせらるゝなどのこともありき、垂仁天皇の御代、大神の御鎮座ありてよりは、倭姫命、御宮仕へとして、五十鈴の上にをはされ、日本武尊も、四方御征討の節、御參拜のことありて、神風伊勢の名、いつしか世に高くなり、國土もいよ〳〵ひらくるに至れり、

日本武尊

白鳥陵

尊は景行天皇の御子にましくてかあくまでつよく御年十六の時、西方の熊襲國に下り、女のよそほひして、唯一人だけるといへる、あらえびすの家に入り、たけるが酒によひたるを見すまし、懷劍ぬきて、胸元ぐさとさし給ふ、諸夷皆をそれふくし、西國始めて安らかとなる、

かくて程なく又東國のえみし叛きしかば、尊は乃ち其の詔をうけ給ひ、先づ伊勢に入りて、大神宮をたがみ、夫れより駿河に至り給へり、此の時賊のものども、廣野に火をつけて、尊をやきころし奉らんとせり、尊、劍をぬきてあたりの草をなぎ給ひしかば、火は反りて賊の方に向ひ、賊のものども、皆やかれしゝぬ、夫れより御船にて、東し給ひ、東北の國々に入り、悉くえみしを平らげ給ふ、還りて近江に至り、病にかゝられ、遂に、伊勢の能褒野に薨し給ひ、彼の白鳥陵といへるは、其の御



墓にして、御笠殿といへるは尊をまつれる社なり、

田村將軍

能褒野より西方に、一山あり、鈴鹿山といふ、此の山は天武天皇の御代をかれたる關所のありし所なり、東海の官道にあたる要區にして、坂路四百八十歩ばかり、昔は

紀元一千四百年代

此の地に鬼神と稱し、山賊多くすみて、まゝ往來の人々をなやませしが、田村將軍うちてこれを平らげき、今猶山腹に將軍の社あり、

田村麻呂、後桓武天皇につかへ奉り、東北の蝦夷をうちて、大なる功をたて、日本武尊とならび稱し、其の名最高し、將軍身の長六尺、面はあかくして、ひげ多し、いかる時は、だけき獸もをそれ、笑ふときは小兒もたゝたひたなつく、兵士の將軍を見るとは父母の如し、皆其の身をわすれて、力をつくせりとぞ、されば彼の鬼神の如きも、將軍のこえをきゝては皆をそれぬかれしといふ、謠の田村といふは此の事をたゝしろくつくりしものなり、

紀元一千七百六年代

伊勢平氏忠盛

田村麻呂が、鈴鹿の山賊をたひらげしことによく似たるは、平忠盛の話なり、忠盛は智勇ともにそぐれたる人にて、伊勢の國に生れ、鳥羽、白河の二帝につかへて、しきりと立身したる人なり、世に忠盛を伊勢平氏の祖と稱せ、

忠盛ある夜、白河上皇の御忍びあるきをなし、給ひし時、御供をなせしをあり、其の夜闇黑にして、雨

ふると甚だし、道に鬼のごときあやしき物あり、ぱつとみへては忽ちきへ、きにては又あらわる、上皇御覽ありて、あれ射てとれと仰せられしを、忠盛かけよりて、忽りくびとりてこれをみれば、化け物にあらで、一人の老僧むぎからをたばね、

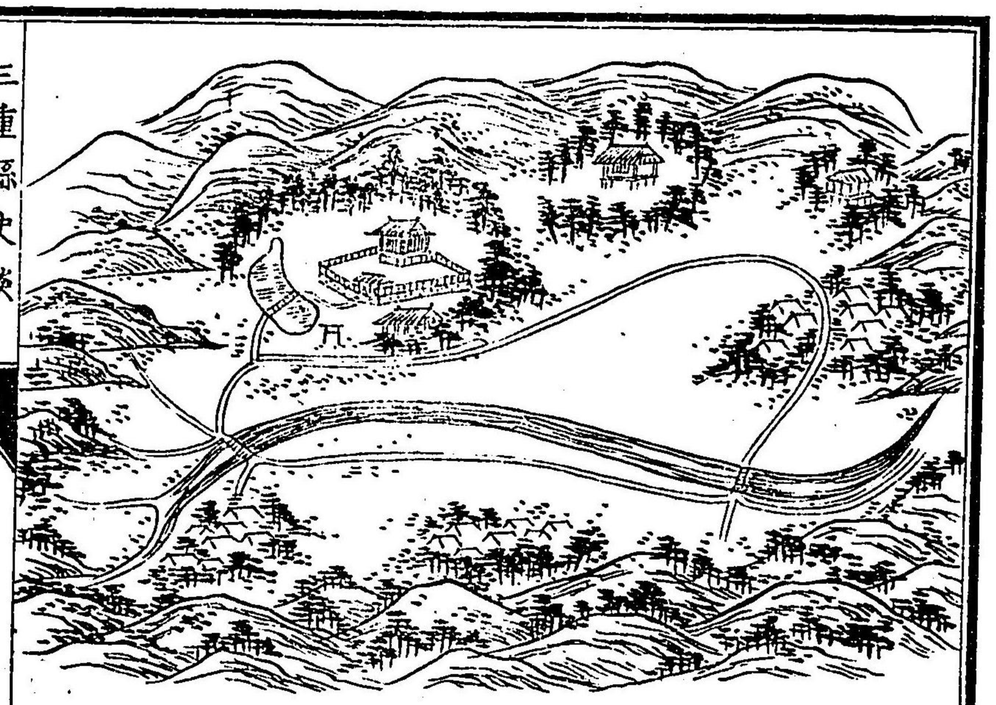
笠のかわりに頭にのせ、燈明の火種を、道をがら吹き行くにてありき、上皇殊の外、其膽勇を御よろこびありしとぞ、

忠盛の先祖は、もと天子の御ちすじをうけたるが、中頃よりいたくをとろへ、都の住居もなりがたく、正衡、正盛の頃は、この伊勢守となりて、安濃郡に住し、自ら安濃津三郎と稱せり、正盛の子は即ちこの忠盛にして、産品村にうまれ、こゝに人となりしなり、忠盛後朝につかへていよ〳〵忠勤をはげみければ、遂に刑部卿といへる官位に進

むにいたれり、忠盛の子清盛も亦、幼時こゝに居れりといふ、清盛の寵を得て、當時にさかへーをは、生等後これをゝるとあらん、余はこのつぎに伊勢國司のことを話さん、

伊勢國司

今をさること、五百餘年前は、南北朝の代とて、天下大にみだれたりき、北朝は京都にありて、足利氏之れが大將軍となり、南朝は吉野にありて、北畠氏、楠氏等之れを守り奉れり、此頃國司とーて、縣地を支配せーは、南朝の忠臣北畠顯能なり、是れ



より數十年の間は、國司の兵と足利方と、所々に戰ひありき、

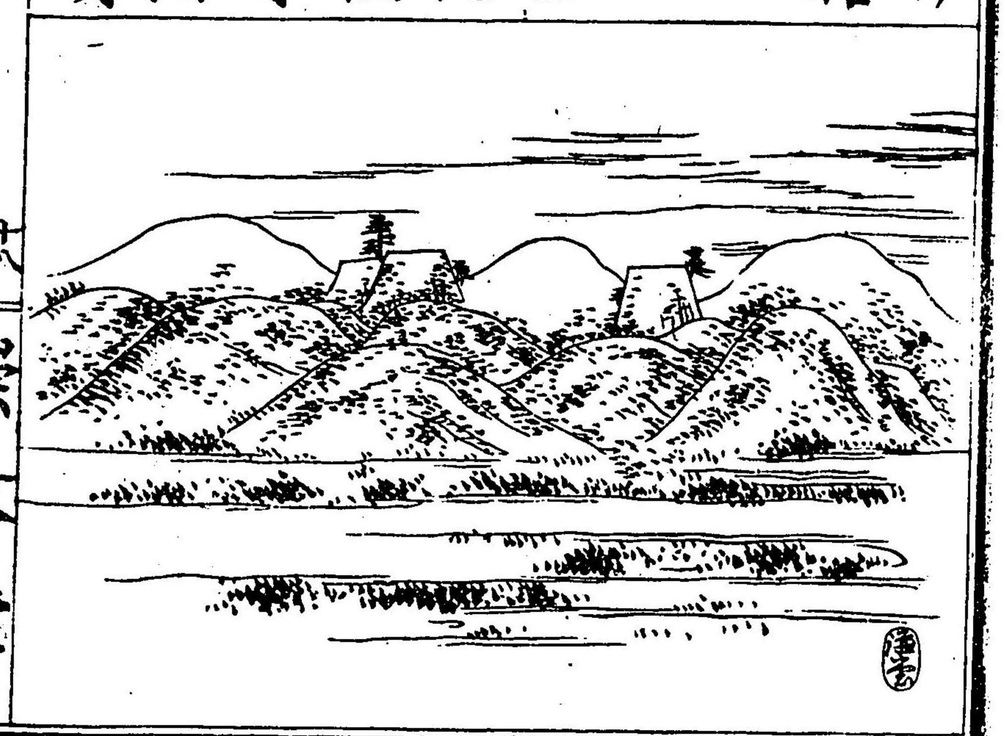
國司とは、國政一切のことをつかさどる役にーて、今の地方官の類なり、名こそちがへ、上古をかれたる國造といへる役と、同じことなり、

さて伊勢の國司北畠と

いふは、村上天皇の末孫にしてもと公家なれども、又武臣として先祖より天子に仕へ奉れり、殊に親房といへるは、後醍醐天皇につかへ、文武の道を以て、最忠節ありき、顯能は其の三男にして、此の時始めて國司に任ぜられ、一志多藝に居住せり、此の頃平家の一族に、平一揆なるものあり、居を鈴鹿郡關谷に定め、關氏と名のり、官軍にしたがふ、顯能、關、鹿伏兎、國府の諸邑を分ちあたふ、一族何れも、忠勤の志あつかりしかば、北勢の官軍日に勢をましてけり、顯能又伊賀の賊をうち遂に南勢五郡、伊賀、大和、紀伊の一部及び志摩を管轄するに至れり、

白米城の戰

顯能の孫滿雅、又忠義の心ふかく、足利氏か約にそむき、南朝の皇子に位をつたへざるとをきくや、大にいかり、諸將とはかりて、義兵をおこせり、



滿雅先づ、關神戸の諸族及び伊賀志摩の兵をあつめ、これを多氣阪内田丸の諸城にわけくばり、れのれは、阿阪の城によりて、賊軍にあたる、足利の兵をひたゞしく來りて城を圍む、滿雅しばく夜にまぎれ、賊の陣屋にきりこめり、敵兵大にをそれ、計りて四方の水路をふさげり、城中水に乏しくなり、兵士漸々くるしめり、滿雅たくみにはかりごとをめぐらし、白米を馬にあぶせて、行水のさまを示せり、敵見て水ありとなし、圍をときて退けり、世これを白米城の戰といふ、

滿雅の子教具父につぎて國司となりし頃は、南北朝既に和睦となりしが、教具父祖の志をつぎて忠勤をはげむ程に、其の本領少しも失ふことなく、一家愈繁昌するに至れり、

信長の長島征伐

降りて正親町天皇の頃は、我が國戰國の代と稱し、天下糸の如くみだれしが、縣地も亦其の餘波をうけて、各地何れも戰爭たえざりき、此の頃豪傑に織田信長といへるものあり、諸國を平定せんとの志をいだき、出兵の支度いと頻りなりしが、此の

伊勢國へもしばく攻め入りしとありき、内につきて長島僧徒及び北畠氏の征伐は、此の豪傑の最苦みし所なりき、

長島の地に、一向宗の僧徒あり、強暴殊に甚しく、遂に其檀徒をさそひ、亂をおこし信長の臣下を殺し自ら長島殿と稱し、勢日にさかんなり、信長乃ち兵數万に將として、をもむき討す、瀧川一益、丸鬼嘉隆、舟師をひきいて信長に會し、大に賊兵を破る、柴田勝家又一城をせめ、男女二千人をころし、耳と鼻とをきりて一船にもり、其威をしめす、既にして、長島の賊城を出で船にのりてのがれ去る、信長をひてこれを討ち、遂に賊兵二万餘人をやき殺せり、ついで長島を一益に賜ひ、北勢五郡をおさめしめしといふ、

北畠具教

此の頃の伊勢の國司を北畠具教といふ、智勇ともにそなはれる大將にして、其の下には又、大宮父子、鳥屋尾石見なんどいへる、つわものも多かりき、具教信長の北勢地方へせめ入るをきくや、大に備ふる所ありき、

既にして、信長北勢の諸城を平らげ、其の勢を以て國司の領地をせめこめり、具教今はかくごのなれば、少しもさわがぎ、阿阪、大河内の諸城により、其の兵にあたる、信長使を阿坂にたてゝ、和をなさんとせしが、城將大宮父子、かたく城を守りて、其の命をきかず、且つ信長の將木下秀吉の左股をいてこれにあつるなど、其勢甚つよし、

一方は信長自ら將として、大河内の城をせむ、城、山をおび谷にまたがり、要害中々よろしければ、たやすくぬきとるべくもあらず、具教又竹鎗數

万をこしらへ、賊兵の登り來るものをつかーめしかば、信長の兵谷にをちて死するもの數多し、信長せん方なく、四方の糧道をふさげて、城兵を苦めんとせり、具教の將鳥屋尾石見、早く其のはかりごとをしり、食に草木をまゞへ、具教はゞめ皆これを食ひーかば、兵氣益々はげーく、食又爲めに乏ーからざりき、信長カ屈ー、次男信雄をして、北畠養子となし、好をなさんとありーかば、具教其の意にしたがひ、漸く和なるに至る、已にして和やぶれ、具教臣下の爲めにころされて、北畠氏遂に

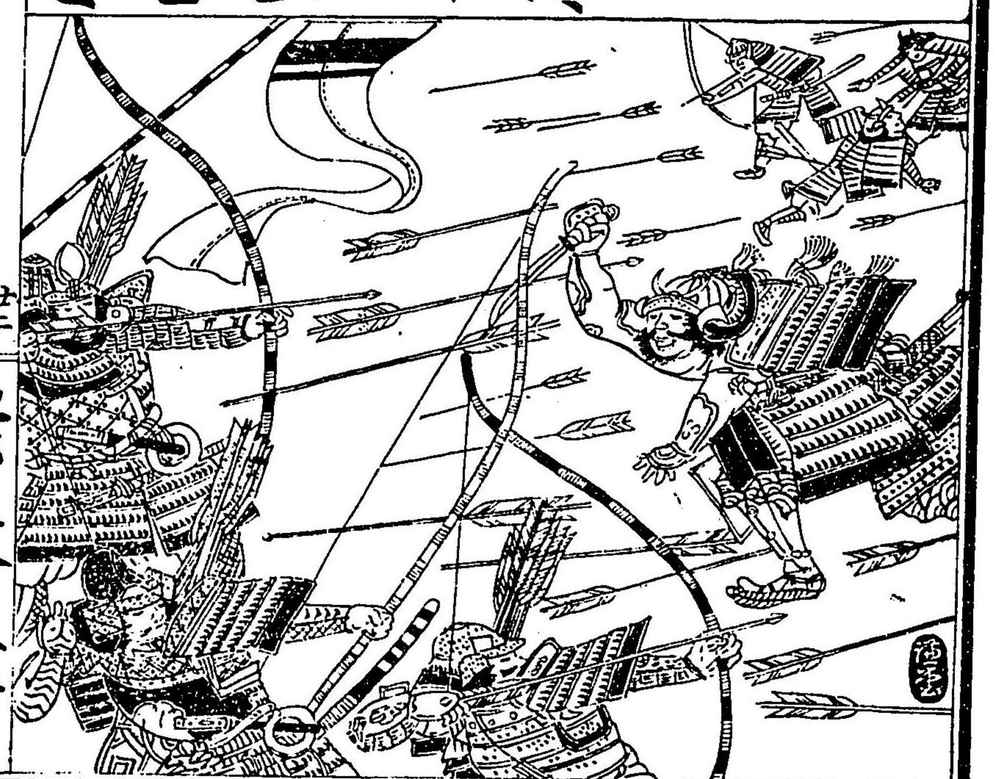
亡ぶるに至れり、顯能國司となりてより、大凡二百四拾餘年なり、

此の頃伊賀志摩牟婁の地方も大にみだれ、戰爭うちつゞきしが、さほど名高き戰にもあらざりき、豐臣氏出づるに及び、筒井定次を伊賀に、九鬼嘉隆を志摩に封せり、牟婁は豐臣秀長封地の一部に屬せり、而して伊勢國は、南勢に蒲生氏郷を封じ、北勢は其の子秀次に分ちあたへり、德川氏に至りて、各地何れも大名なるものありて、其の封土を私有し、民皆大平の治を見るに及べり、余はつ

いでにこの大名の二三面白き戰さ話をかたらん、

本多忠勝

本多忠勝といへるは、桑名の大名なり、年十四の時、叔父忠眞にひきゐられ、戰にをもむく、忠眞一敵將と鎗を合せ、忽ちこれをつき



たをし、忠勝を呼びて、其の首をきるべーと命ぜり、忠勝曰く、我れ借禪角舐を學ぶを好まず、叔父暫く我がなす所を見給へ、とて、をどり死屍をこへ、他の一將とくみ合ひ、遂に其の首を落せり、戰後忠真其の狀を家康にかたる、家康大に喜ぶ、後封ぜられて桑名の城主となる、忠勝十四歳より軍に從ひ、大小五十餘戰、戰ふ毎に皆かつ、また一創だにうけーとあらず、卒するに及び、家康深くこれをれしむ、神戸の本多氏は則其のあとなり、

藤堂高虎

高虎は藤堂氏の先祖にして、小兒の時よりそのふるまひ、成人の如くなりければ、見る人、皆、未來の名將なりといひあへり、嘗て一賊あり、民家にかくる、父其長子と共にこれをうゐ、高虎時に十三歳なり、父

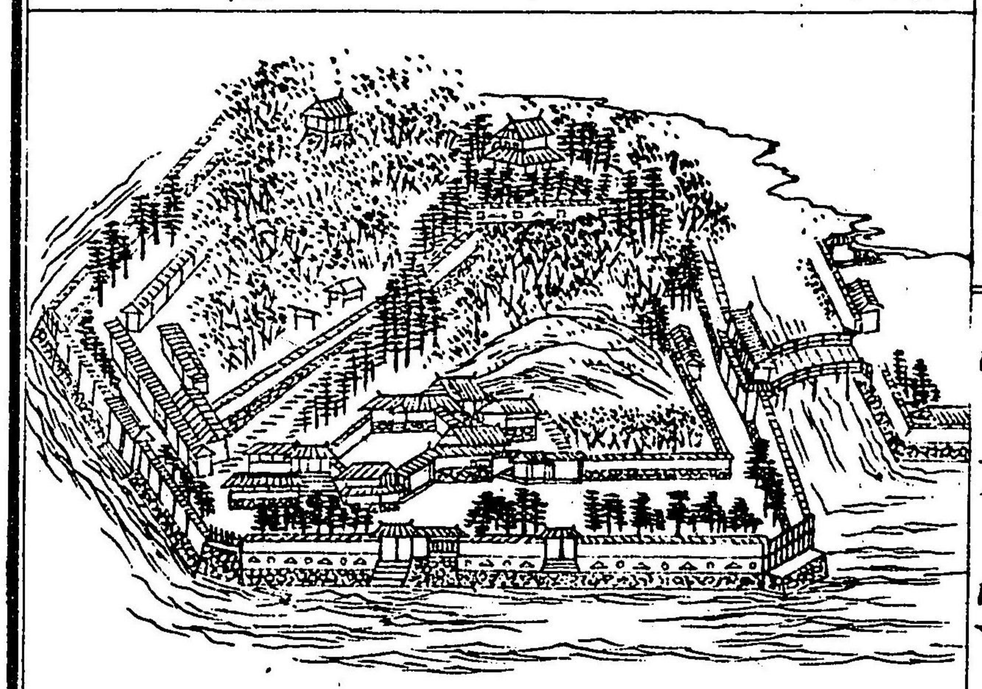
の已れをつれざるをかなしみ、乃ち刀をさげて、ひそかに其の跡を追ひ、遂に其の賊をきる、父見て大に奇とせ、長ずるに及び、勇武のほまれ益々高く、大小五十餘戰、一も其の功なきことなし、秀吉の朝鮮をうつや、舟師の大將として、大に明軍を海上に破り、敵船を得たるを夥し、當時戰功第一と稱す、德川氏の興るに及び、猶海船の政をすべ、威海上に行はる、家康嘗ていひけるやう、我れの死後もし事あるも、汝大將軍たらば、天下を定むべしと、後封ぜられて、伊賀津の城主となり、子孫世々其の封

をつげり、津市の公園にある、高山神社は、即ち高虎の靈を祀れる所なり、

九鬼嘉隆

大閣朝鮮の役、藤堂高虎等と共に水軍に名ありし大將は、九鬼嘉隆なり、牟婁郡に生れ、兄光隆と共に、武勇其の近隣にきこへたり、其の攝津に赴くや、途、強暴なる海賊ありて、舟行中々かたし、喜隆等少しも意とせず、兵船を率ゐてのり出せしが、果して賊兵の來りせまるにあふ、嘉隆火箭を射て、之れを討ち、にぐるを追ひて其魁をきれり、後尾

張の海賊志摩の諸島熊野の沿海をおかし人民を苦しめしとき、又出て、これをうち賊巣に入りてかしらを殺し、其の害をのぞけりといふ、嘉隆又志摩國をうちて鳥羽城をとり、大に壘壁をきつきて、之れにをる、既にして秀吉全國をあげて



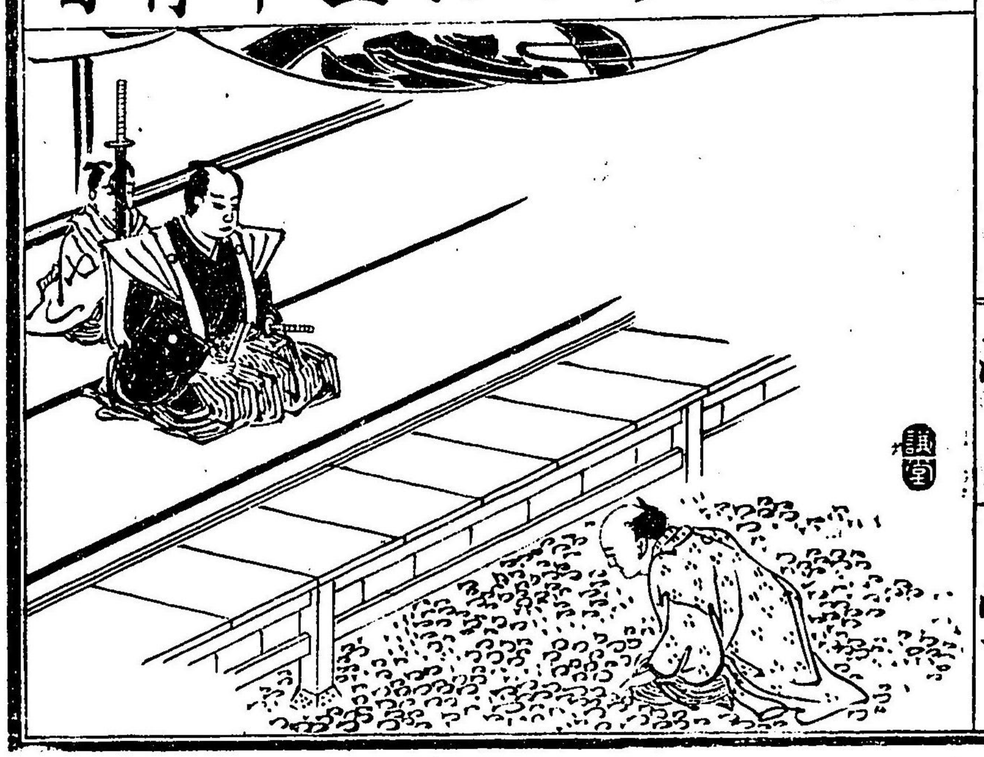
嘉隆に賜ふ、秀吉征韓の時、嘉隆に命じて兵船數百艘をつくらしめ、又水軍の大将をいひつかれり、嘉隆日本丸といへる大艦をひきゐ、藤堂高虎等と共に明軍を海上に破り、勇武をあらわせり、

山田奉行

前にのべし如く徳川氏の時代は、縣地の各所何れも大名なるものありて、其の封土をたもちゐべての政事を行ひしが、獨り山田の地は、別に山田奉行なるものを置き之れを支配せしめたり、此の奉行といへるは、今の縣知事の如きものにして、

その上公私のさばきとをつかさどりしものなり、

當時此の地に、奉行となりしは、大岡忠相といへる人なり、人となり聰明(ソウメイ)にして嚴直(カシコク)に、其の裁判に至りては、一もあやまりしことなし、忠相此の地に奉行たりしとき、紀州領の百



姓と、公私にかゝはる公事起りたるが、人々何れも紀州にかちがたきことと思ひしが、忠相少しも其の勢にをそれず、たゞちに其の曲直(ヨシアシ)を正しゝかば、人皆舌をまけりといふ、

又吉宗將軍が、紀州にありて、德太郎といひし頃、一夜此の伊勢阿漕浦の殺生禁制(セッシャウキンゼイ)地に來り、網をおろし、無法の處爲(ラコナシ)ありしを、忠相をしてをくべきことにあらずとなし、自ら其の地に至り、從士(トモ)に命じて繩をかけしめ、山田奉行所にひきゆきて、其の一らべをなせしともありし、其の嚴直(ゲンチョク)概(オホ)ね此の類なり、德太

郎後将軍の相續をなすに及びめして江戸奉行となし大にこれを寵用せり彼の昔話又芝居などにて見聞する大岡越前守は則ち此人なり、

松平定信

此の頃桑名の城主久松氏の祖先に松平定信といへる人あり賢明にして學問ひろく常に民事に心を用ゆ後めされて家齊將軍の侍從となりしが此の時政事むき費用多く紀綱も亦ゆるべり定信いたくこれを憂ひ身に粗衣をき食膳又常に一菜勉めて無用の費をはぶき賢き人々をあげ用ひしかば政大にあらたまり天下何れも其の風にならへりといふ又朝廷のをとろへをなげきざかんに大内の造營をなし孝義録をあみて孝子又は義僕をあらはし其の功の大なること一々あげていふべからず鈴鹿の孝子万吉の出でしは此の時代のことなり後隱居して樂翁といふ卒するの日天下これを

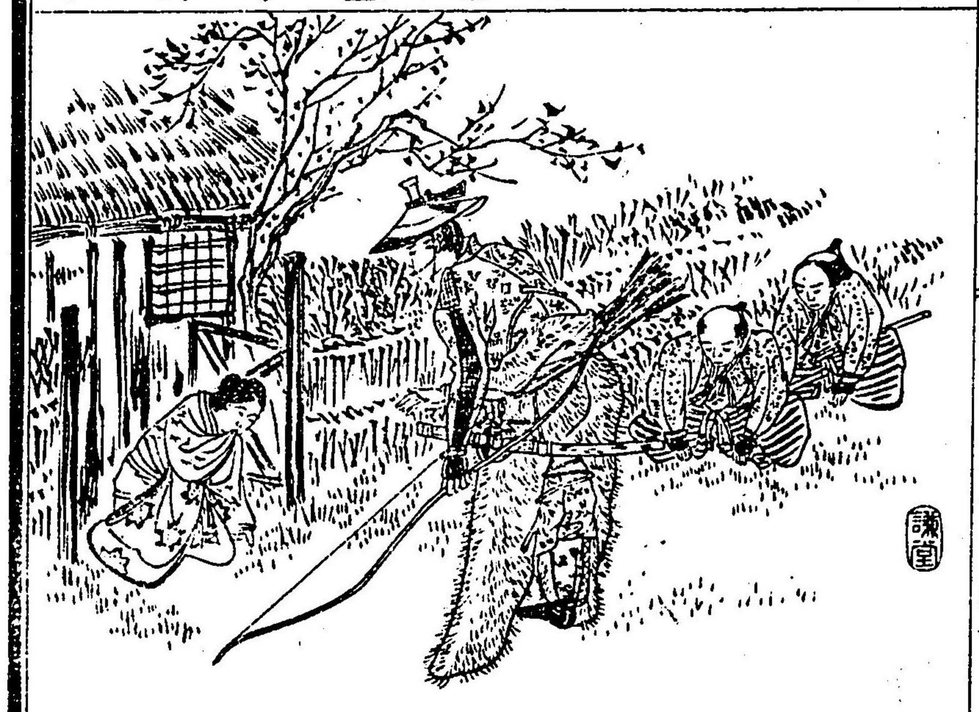
かなーまざるものなし定信常にいふ、政事の本は學問にあり、學問にあらざれば政事はあがらずと、大に教育に心を用ひ、學事の振興をば計れり、有名なる桑名の立教館は、此人のはじめー所なり、

藤堂高兌

高兌といへるは、高虎七世の孫なり、聰明にして仁慈の心あつく、幼少のとき、嘗て四支不具なる乞子を見さても不便のものよといわれたるが如き、左右の人々、何れも其童年にーてなさけ深きを感ぜりとぞ、後宗統をつぐに及び、果ーて中興の主と仰がるゝに至れり、殊に孝心あつく、父の病にある、日夜かたわらにありて怠ることなかりきゝかも身を奉ずること倹約にーて、常服は木綿にかぎり、食膳又一菜にすぎず、以て下をひきゐーかば藩中の士風大にふるひ、政いさゝかの弛みなかりき、

又よく人をーり、其功績あるものは身の倹約にひきかへ、多くの加禄を賜はり、才學に長じたるものは卑賤よりこれをぬきんでられたり、又學

を好むのあまり、内用(ウチムキ)として貯へ一金をなげうち、藩士の爲め有造館といへる一大學館をおこし、大に文武の道に力を用ひしかば、士風愈〻振起(シンキ)し人物のあつまりしと實に夥しかりき、津阪孝綽、石川之聚、河村尚迪齋藤正謙等は此頃の有名



なる學者なり、

高兒又忠臣孝子をしたふのあまり、楠氏の碑になぞらへて結城宗廣の碑をたて、時の孝女登世の家をたづねて、其孝を賞せしが如き今猶人々の感嘆(カンタン)する所なり、

農業　正木嘉兵衛　西島八兵衛

さて又大名の下にたちて、民業に心を用ひし人をいへば、正木嘉兵衛、西島八兵衛など、其最たるものなり、

正木嘉兵衛は、桑名侯にしられ、員辨の大泉郷、廣

野の開墾に力をつくせし人なり、自ら多くの私財をなげうち、田畑百町餘歩をひらき、耕夫を移住せしめて一村をおこすの基をつくれり、今楚原村とて郡役所のある所即ち是なり、

西島八兵衛は、藤堂侯につかへ、水利のことにくはしかりしが、其の一志に奉行たるや、雲出川の流域をかんがへ、遂に其の流をひきて、近傍數村の灌漑に便ぜしめ、大に農事の發達をはかれり、土民其の德をしたひ、社をたてゝこれをまつれり、

其の後又伊賀に、加納直盛、中野所平といへる人あり直盛は三野原の荒地をひらき、近傍の土民をうつして新田宿といへる一村をおこし、所平は大庄屋をつとめけるが、近傍の庄屋をすゝめ、開道の事に力をつくせり、

此の頃民政に、關係ふかき役は、郡奉行、大庄屋等とす、郡奉行は、主君の命をうけ、郡の政事をつかさどる役人にして、今の郡長の如きものなり、庄屋大庄屋は、村々の年貢其の他の納め物を官府にいだし、又一村の總代となりて、民情を訴ふる役目にして、今の町村長に類せり、

商業　三井宗笠　河村瑞軒

つぎに商業の上につきていへば、松阪桑名の地方は商況（シヨウキヤウ）いとさかんにして、有名なる商法人も亦多かりき、徳川氏のはじめ頃、京大阪の商人ゝきりと支店（シテン）を江戸にひらきゝとありけるが、この縣地より出でゝ人に、三井宗笠、河村瑞軒などよべる商法人ありき、

宗笠江戸に出でゝ後は、一ゝほ此の道に心を入れ、伊勢木綿其他各種の國産をはこび、大に販賣（ハンバイ）の業に從事せり、さる程に店頭（ミセサキ）日にまゝにぎはひ、

ゝばらくの間に大なる利益を得、遂に徳川幕府より呉服御用店の名を許さるゝに及べり、其子孫今猶彼の地にありて家業をつぎ、近世銀行を設けて三井の名天下にきこゆるにいたれり、

河村瑞軒は其初め至りて貧乏なりしが、天性奇才（サイ）ありて、商機にくはしく、利をうること實に巧（タクミ）なりき、明暦の年江戸に大火あるや、瑞軒忽ち旅装（ヨソヒ）をなし、岐蘇山に至る、木商の門に小兒ありてたわむれあそぶ、よりて小判三枚を出し、玩具（モチヤ）となしてこれに與ふ、已にして門に入り、木を買は

んとをかたる主人其巨商なるを信じ木材賣買の約をなす、程なくして江戸延焼の多き、材木の價大にあがれり、瑞軒是によりて大利をしめ、家業を起すに至れり、さて此頃までは、江戸と奥羽の海路通ぜざ、物産を運漕するを能はざりしが、瑞軒始めて此航路をひらき、又志摩の菅島に烽火をあげて危難をよげしむ、是より海運大にひらけ、上下長く其便を得たり、

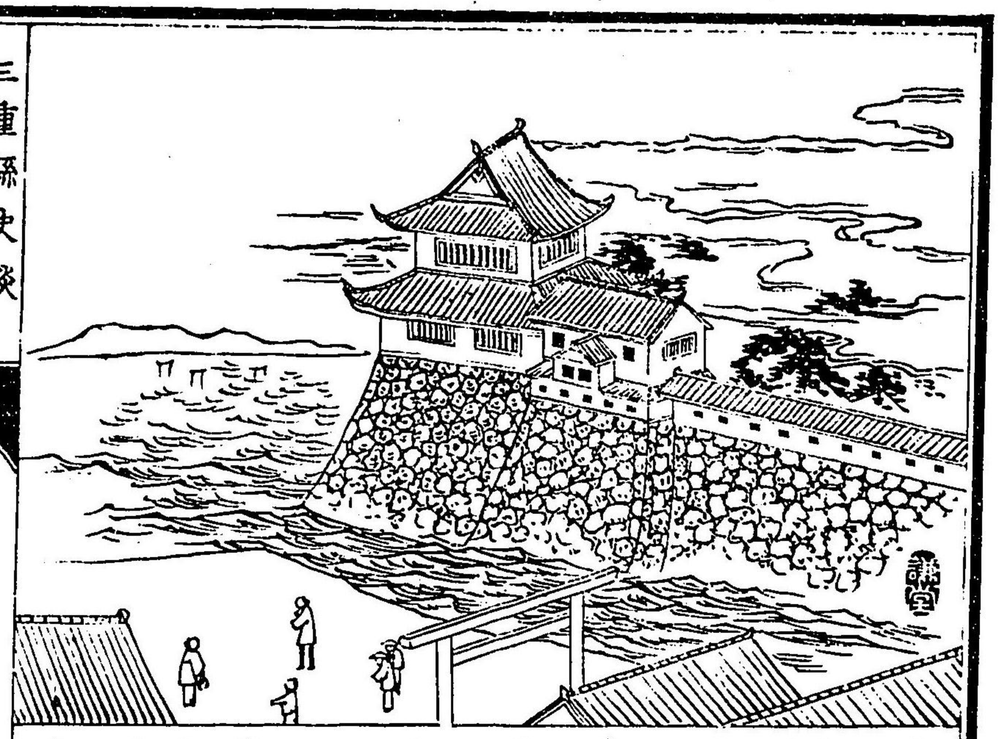
陶工、其他の工藝

陶工の業につきていへば、萬古焼、安東焼、伊賀焼、朝日焼等數種あり、中にも萬古焼はその最有名なるものにして今は外國にまで輸出せらるゝに至れり、此焼はもと桑名の商人、浪沼五左衛門の創製にかゝり、雅にして趣きあれば、人々の賞玩をうくること大なり、五左衛門當時外國よりもたらし來る、交趾、和蘭の陶器にならひ、之れを製せしに、其技真にしまり、皆稱して奇なりとなす、後幕府にまねかれ、御用陶師の名をうけしが、遂に病みて死せり、其後殆んど中絶せしが、文政年間朝明小向村の、森有節製陶を好むのあまり、

五左衛門の志をつがんと欲し遂に竈をつくりて、萬古燒の業を得せり、殊に其器に急須酒壺等實用の者多かりしかば、内國人の賞用をうくること甚大なりき、

伊賀燒は久しき以前よりある所の者なれども、藤堂氏にいたりて其名大に世にしらるゝことになれり、山道手あした燒などは、伊賀燒にても最古き所にして、茶人の愛する所なり、

是よりさき後柏原天皇の御代、（今より四百年前）松阪に祥瑞といへる人あり、明國にわたりて、磁器を製す



ることを學びかへりて、肥前の唐津に其業をひらきしともありき、其他伊勢素甁の諷曲などありしをみれば、此國古へより陶業のひらけしことを明らかなり、

其他工藝には、諸藩の邸宅をはじめとし、土木の事までさかんなりし

かば、木匠、石工業大に進歩せり、且つ其業のさかんなるにしたがひ、これまでの一業もわかれて數業となり、大工棟梁、塗役、細工人等の名をこるに至れり、

文學　芭蕉翁

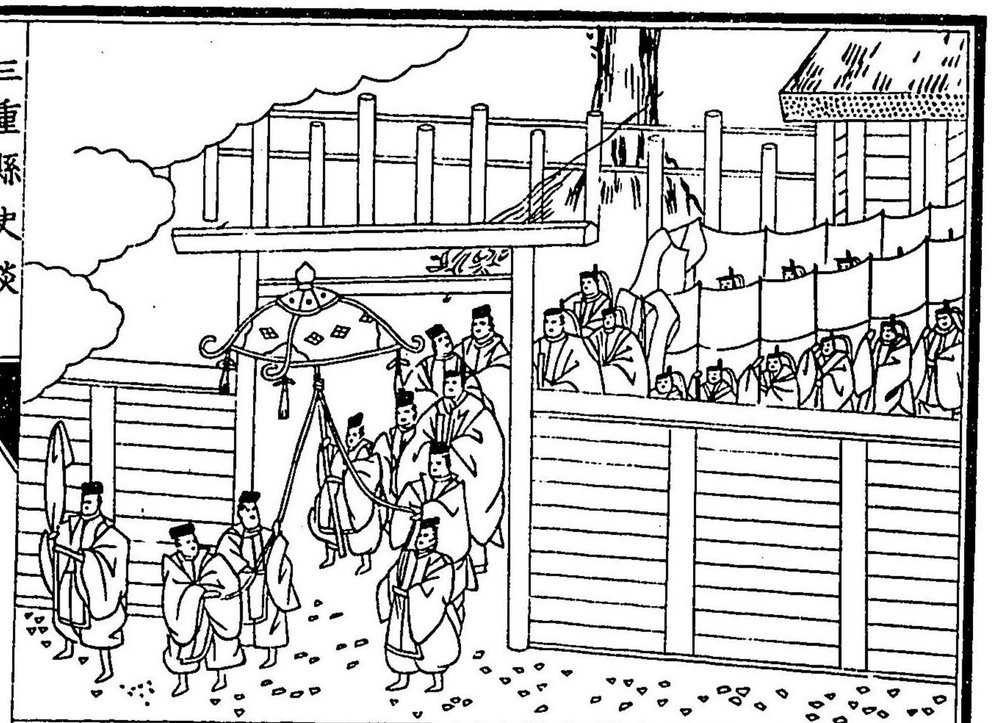
文學も又、中々さかんにして、國學、漢學はいふまでもなく、俳句、笠附などの技大に流行を見るにいたれり、芭蕉翁といふは俳句の達人にして、伊賀上野は其の生國なり、學問ひろく常に西行の風をしたひしが、後身を雲水にやつし、數年の間

諸國をめぐり歸りて江戸深川の一庵にすみ、此の道を以て自らたのしめりといふ、

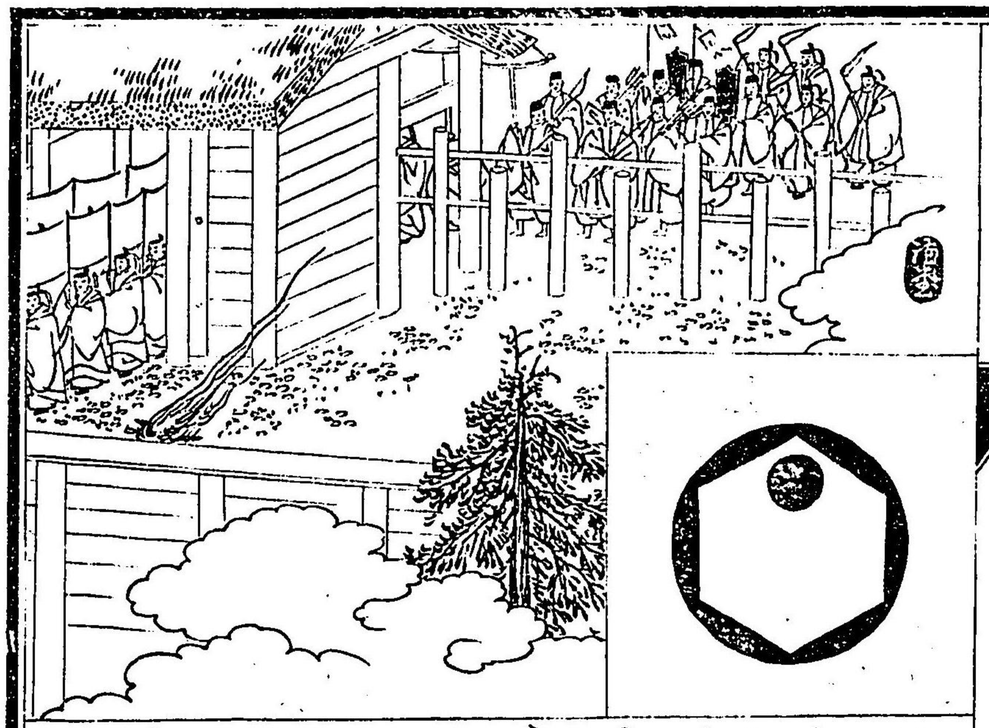
古池や、蛙とびこむ、水のおと、

枯枝にからすとまりけり、秋のくれ、

是等はその最名高きものなり、當時太平年久しく人の心も自らのどかなれば、此の技大にもてはし



濃郡の人、且て徳川氏よりめされて質問をうけしが、一々これを辨解し歸路兩國橋に高札をたて、題して遠く來りたづねよ勢州淡齋と、其の心をこりのせしをみれば、淡齋の學問にふかきを以て見るべし、又敬神尊王の心ふかく本居宣長等



やされ、無學の人も亦、これを能くするものあるに至る、今日其の流をくむもの、何れも翁を宗匠(ソウシヤウ)(センセイ)とし是を敬せり、

谷川淡齋

足代弘訓

國學には本居父子をはじめ、谷川淡齋、足代弘訓の諸名士あり、淡齋は安

と交りてひたすら皇風の振起に力をつくせり
といふ、
足代弘訓は山田の人なり、常にいふ、わがともが
らは神地に生れ、數代神恩に浴(ウルル)それば、著述(チヨジユツ)を世
にのこし、神恩の萬一にむくひ奉らんものと、夫
れより國史、國語の研究(ケンキユウ)に力をつくし、本居(ホンヲリ)其の他
の諸學者につき、いよ〳〵聞見をひろめしが、其の手
になりし書物、果して千卷あまりの多きに及べ
り、仁孝天皇嘗て其の志をよみせられ、硯面を下し
賜りしともありき、弘訓の先代に又弘興といへ

る人あり、敬神尊王の心ふかく、大神宮の御造營(ゴフシン)
に最力をつくせりといふ、

山中天水、其の他の漢學者

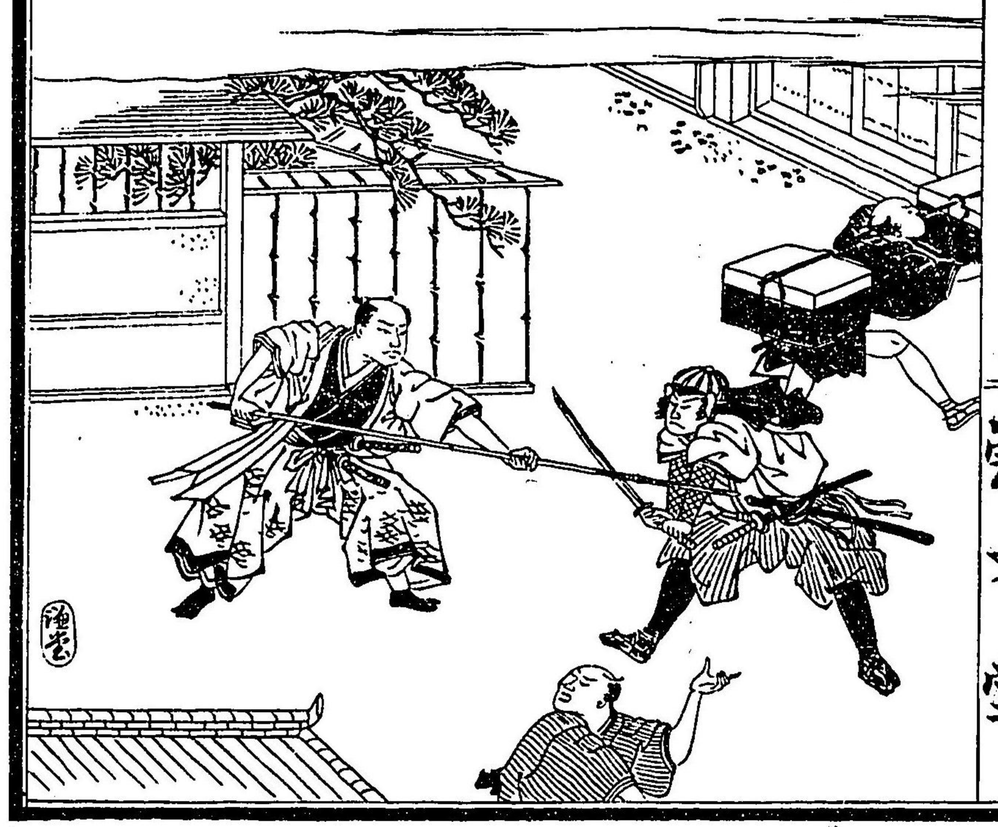
又漢學者に、山中天水といへる人あり、學問を好
むのあまり志を立て、京都にをもむきしが、元來
貧究の生れなれば、一冊の書物すら買ふと能はぎ、
されども其の志をくぢかぎ、勉學に日を送りしが、
後江戸に至りて山本北山の門に入る、時に北山
の塾、生徒いまだ多からぐに、天水乃ち奴僕(シモベ)となり、
米を炊き水をになひなどして其の勞に服し、餘暇

あれば則ち學問をつとめし程に、其の業益す、み遂には塾を江戸にひろぎて、教授するにいたれり此の頃鳥羽に北條霞亭、鷹羽澐淙あり、神戸に漪蘭候あり、津の諸大家と共に當時有名の人々なり、其の他書家畫家なども有名の人多く、既に各藩の下に、祐筆、繪師の職あるに至れり、かの月仙、韓天壽の如きは、當時民間にありて名高き人なり、月仙の繪最其の妙をきわめ、畫を乞ふもの常に其の門に接せり、しかも公共の心ふかく、其の得たる錢を以て、山田近傍の村々にめぐみ、又逢山の險路を平らにして、行旅の便をはかりしとあり、韓天壽は書法にくわしく、石摺版の發明は、當時此の人の手になれりといふ、

藩治の有樣

さてこれまで、伊勢を支配せし大名は、津の藤堂氏、桑名の松平氏、亀山の石川氏、神戸の本多氏、久居の藤堂氏、菰野の土方氏、長島の増山氏、にして、其の他紀伊の徳川氏、忍藩の松平氏、吹上藩の有馬氏等の別邑及び山田奉行所等の支配地ありき、而して伊賀に藤堂氏に、牟婁郡は徳川氏、志摩は

稻垣氏に屬せしなり、當時これ等の各藩は何れも勇ましき氣風をはしめんがため、演武校を設け兵學、鎗劍柔術等を教へ、又屢々猪狩り鹿狩りなどの催しありて、山野をかけまわり、以て軍事



を習はしめたり、又主從の間は恩義をとふとび、相對の上には卑怯未練を恥とし、武士は常に双刀をおび、袴を着し、平民とは大に其の趣きことなれり、ことに復讐のことは當時人々の最も稱賛せし所にして、伊賀越のことは其の一例として見るべし」、又文事を學ばしむる爲めとて、各藩概ね學校なるものありしが、之れは藩の子弟にかぎり入學するを得るのみにて、平民はあづかる事能はざりきさからば民間の教育は如何といふに、各藩の下、多くは寺子屋とて今日の小學校の如きもの

ありきされど其の教ゆる所習字と日用文を修めしむるにすぎず、且つ又朝の間に少しく書物の素讀を教ゆることもありしが、概して習字の一方に力を入れしむるのみ」ことに當時は交通の道ひらけず、山間の地にいたりては、開明の運に向

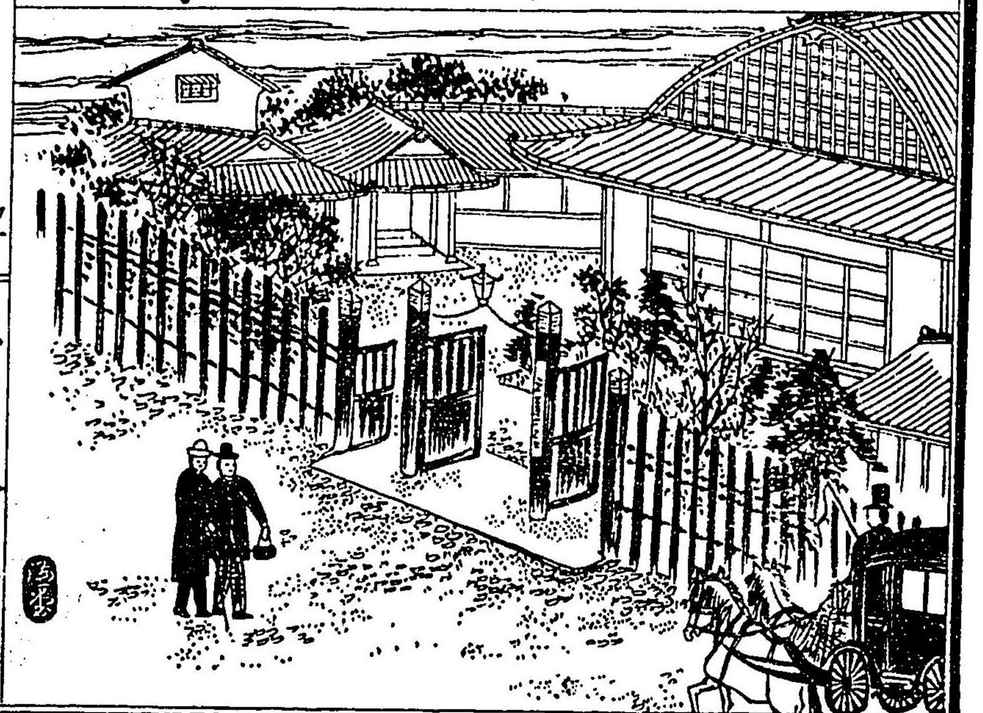
ふとたそし、故に平日其の産を修むるや、多くは又祖の傳ふる所を守り、又物價の高低、商賣のことなどしるもの少し、現に牟婁の村落にては、百年以前まで、村民の長として、算盤をしらざるものもありき、或は村中の約束をなすに繩をむすびて、信とせしこともありしとぞ、

法律もいたりて、疎漏にして世間にしらむるなどのことなくたゞ役人の心まかせなり、故に人民己が身体財産をまもらんが爲めに、訟をおこそに其の役人よろしければ幸ひなれども、おからし

ざれば、全くこれに反す、百姓五左衛門(伊賀國)潤田莊右衛門(紀州領)が民苦を訟ふるさま、何れも當時法律の一般をしるに足るべし、

縣治の沿革

藩治の時代はまづ右にのべし有樣なりしが、德川氏亡び明治の御代となりては四民皆同一の權を有し、其他教育に法律に何れもよくとゝなひ、殊に教育は最よくひらけ、如何なる山地に至るもゝ學校の設けあらざるはなく、又小學校の外に、中學校、師範學校などありて志あるものは誰にても入學するを得べきやうになれり、そもこの次第は如何といふに、明治四年始めて、安濃津縣を津に置き、北勢八郡及び伊賀全國を支配し、度會縣を山田に設け、南勢五郡志摩全國及び南北牟婁郡を管せり、後五年に至り、安濃津縣



を四日市に移し、三重縣と稱へーが、翌年之れを津に移し、後九年度會縣を廢して、三重縣に合せり、十一年管内を十五部に分ち、毎部に郡役所を置き、郡治を掌りーが、二十一年市町村制の發布ありて、大に町村の區劃を改め一市十八町、三百二十七ゥ村とし、自治の制を布くに至れり、殊に縣會、市町村會等の設けありて、經濟のことを議し、昔の如き私政は、全く其跡をたつに至る、

近藤真琴　松浦竹四郎

さて明治の御代にをいて、名高き人は、志摩の近藤真琴、一志の松浦竹四郎とに、真琴はたゞ父をうしなひ、母の手にそだてられーが、毎に學問に志あつく、青年の頃、既に和漢洋の三學に通し、殊に數學の道にあかるかりき、明治中興の時出てゞ力

を國事につくし遠く外國につかひせしこともあ
りき、
真琴もと九鬼氏の遺風をうけ海軍のことにくわ
しかりし程に主として海軍學校の必要なるを
となへ、東京に其の豫備校をたこし、又其の支校を鄉
里鳥羽にひらき共に其の道を講ずること十數年、大
に人材を出すに至れり、卒するの後、有志の人々
碑を舊城址の下にたて永く其の靈をまつるとい
ふ、

雨に雪に氷にくだく心をもあわれひ

たまへ垂舞の神

右の一首に破れたる單衣を垂舞の社前にのこ
したるは、蝦夷の内地を獨行探檢したる松浦竹
四郎の話なり、竹四郎十六歳のとき、由ありて家
を出でしが、何かな志を立て、國の爲め大業をな
さんものと、日夜心をくだきしが、會々北海道開
拓の擧ありしかば、心に思ふやう、北海道は我が
國の寶庫なり、吾の志をなす此の時にありと、即ち
募に應じて其の地に入れり、當時北海道はひろく
とーて雜木くまなくをひしげり、開拓の業など

見るべきものなし竹四郎刈苦して、深く内地をみまわり、土民に慈悲をほどこし、又穀類をまき野菜をうゑ、蠶を養ふなどの法を教へつとめて其の土の繁榮を計りけり、又土民の壯者をつのりて農間武技を習はしめ、以て不虞を戒しむるなど其の用心至らざるとなし、後擢んでられて、開拓官吏となり、其の名大に著はる、

竹川竹齋

射和村の竹川竹齋といへる人も亦竹四郎と同じく名高き人なり、勸農の心ふかくかつて射和村の貧弱なるを見て大にこれをうれひ、多くの金をなけふち村民を役して溜池

を改修し新田を開き、廢田をたこ等前後數十町にいたる、これより射和村の地大に其の價をまし、全村遂に富饒となれり、其の他射和文庫をたて、茶園をひらくなど、其の公益に心をいたせーを實に大なり、

明治廿六年一月三日印刷
同　年一月五日出版

定價金拾五錢

著者　村上政太郎
伊勢國津市大字出口町四番地

發行兼印刷者　豐住謹次郎
同國津市地頭領町十九番地

賣捌　各地書林

版權所有